

文京区の水

人間文化研究科人間環境科学専攻助教
（生活科学部生活環境学科生活工学講座）

大瀧 雅寛

そもそも文京区は水に恵まれた土地である。周りを見渡せば緑が多い事に気づくだろう。これはそもそも水が豊富に存在しているという証拠である。そこらあたりをぶらりと散策



古香井（椿山荘提供）

（関口2丁目）などなど。そもそも我が大学の「お茶の水」の名は、江戸時代に神田川脇より湧出した水よりお茶を煎じて二代將軍秀忠に献上したことに由来する。

このように見てみると、文京区は古来より水量だけでなく水質にも恵まれたところであつたと言える。文京区の往時に思いをはせれば、多数ある台地の袖からこんこんとわき出す清涼な地下水に咽を潤し、あるいは昼時に一服のおいしいお茶に心を癒す、そんな原風景を思い描くことができる。

それでは今の文京区の人々はどんな水を飲んでいるのだろうか。生水を飲んだりお茶を沸かすのであれば水道水かペットボトル水であろう。水道の水と言えば、私が本学に赴任してきた時のこと。研究室の蛇口を捻ると「茶

色の水」がドボドボと……。さすが「お茶の水」と感心した覚えがある。まあ、それは老朽化した水道管のせいであり、来年度には建物の改修工事によって、そんな風流なことはなくなるであろうが、そうでなくても文京区の人で、飲料水を近くの井戸や湧き水から汲んでいる人は、そうはいないであろう。

現在の文京区の井戸・湧水（つまり地下水）はどうなっているのだろうか。水質の面から見ると、都内で飲用可能な井戸は、ほんの一握りしか残っていない。文京区もこの例に漏れずほとんどの井戸水はそのままでは飲用不可となっている。従って飲むためには煮沸するか、消毒などの対応をしなければならぬ。また水量の面から見ても湧水量や地下水量は年々減少していると言われる。洵れ井戸の数や湧き水が出なくなった箇所は年々増えており、今や質に関して水量に關しても水に恵まれた文京区というイメージを実感することは難しくなってしまう。

なぜこのようなことになってしまったのか。その理由としては様々なことが考えられる。都市化に伴って地面がアスファルトやコンクリートに覆われる。すると降った雨は地面に吸い込まれることなく流れ去る。その結果、雨によって地下水が補充されるような流れが遮断され地下水量が減ることになる。また質の悪化に關しては、埋設された下水管からの漏水による汚染の影響や、中には有害な物質の不法投棄による汚染もある。このような状況では安心して地下水を汲み上げて飲むというわけにはいかない。

それでは今我々が日常飲んでいる水はどこから来ているのだろうか。文京区に配られている水道水はそもそもこの水なのだろうか。東京都の水源は大きく分けて二つある。多摩川水系と利根川水系（江戸川、荒川など）である。これらの水源から水を引き、浄水場で処理をして配水する。東京都に浄水を供給

している浄水場は現在十箇所あるが、どこかの浄水場が事故等で配水をストップすることになっても、他の浄水場からの配水でカバーできるように、配水管は相互に繋がられネットワークを組んでいる。そのため違った産地（水源）のミックス水が配られていることになる。というわけで「この蛇口から出てくる水は、川から来た水だから美味しいわ」というような判別はできない。ただしどこに大きく依存しているのかはおおよそわかる。文京区の水道水は荒川・多摩川の両方（東村山・朝霞・三園浄水場）から来ている。取水している場所はどちらも文京区からは遠く十数キロ離れた場所である。

考えてみれば足下に豊富な地下水があつたはずの文京区の人々は、遠い場所からわざわざ水を運んで使っているのだ。これには勿論「昔に比べて居住人数が激増したこと」や、さらには「現代生活が水を大量に使用する様式となったこと」も主な原因であり、地下水の質が悪くなったからだけではない。文京区の様な都心において現代生活を送ろうとすれば、必要な水量をまかなうためには、やはり遠く離れた水源に頼らざるを得ない。

とはいえ、たまにはおいしい地下水をゴクゴク飲んでみたいものでもある。汲み上げた水でお茶を沸かして、ティータイムとしゃれ込みたいものもある。

都内には飲用可といわれる井戸はほとんど無いと述べたが、文京区の中には飲用可能な井戸が残っている。上に挙げた例の中では唯一関口芭蕉庵井戸が飲用可となっている。このように未だ飲用可能な井戸がまだあるという事実も都心においては例外と言つて良く、水に恵まれた文京区の面影をいまだ残すものと言つてよいだろう。

たまには散策がてら井戸や湧き水を訪ね歩き、かつての豊富な地下水源を体感してみるのもいかがだろうか。